

市民環境大学OB会 ニュースレター



第53号 2025年6月19日 発行

2025年4月 八重桜

市民環境大学OB会の新会長選出される!!

日野市民大学OB会は飯島前会長が体調不十分により、長い間会長不在の状態です。定例会や環境測定活動などが行われてきました。その間、原田さんが会長代行として、奮闘頂いてきましたが今年3月の定例会において田中良一さんが念願の新OB会長として選出されました。

今回新OB会長に就任され、以下にご挨拶を投稿いただきましたので紹介します。

就任 ご挨拶

OB会長 田中 良一

このたび、新会長として推薦をいただきまして4月1日付で受諾いたしました。よろしくお願いいたします。

この会は、名称にありますように、小倉先生が主催されておられます「日野市環境大学」の受講生有志により「環境大学OB会」として発足されたものです。

この会の活動は、先生の「継続は力なり」という言葉と行動に基づいて月1回カワセミハウスでの、会員各位による問題提起とフランクな協議。

黒川清流公園をベースにした湧水測定、放射能測定のフィールドワーク、有志による身近な水環境全国一斉調査への参加。

これらをまとめた活動記録とOB会コラム等をニュースレターとして報告書を作成しております。これまで続けてこられたのは、飯島、原田の前会長と先輩方々によるところは大なるものと考えております。

今後も会員みなさまの思いを享受しながら、よりよいOB会になるよう努めてまいります。

2025年春 日野市多摩平の桜



旭ヶ丘グリーンベルトのソメイヨシノ



多摩平団地横の八重桜

OB会メンバー 活動イベントニュース

- ・ 身近な水環境の全国一斉調査 参加予定 6月8日(日)
- ・ カワセミハウス環境パネル展 参加予定 6月7日～21日

OB会 例会情報 話題提供と話し合い情報

- ・ 3月例会：飯島会長辞任表明により新会長田中良一さんを選出
4月からの新体制に移行にともなう各種手続き
- ・ 4月例会 「年金制度改革の政府原案について考える」 末包さん紹介
年金所得制限の緩和、基礎年金の底上げ、パート社員の厚生年金への加入拡大
- ・ 5月例会 「トランプ政権を生んだアメリカの社会環境について考える」 末包さん紹介
世界の構造が変わる、反DEI(多様性、公平性、包摂性)、名門大学との対立

OB会コラム①

今回のOB会コラム①は久しぶりに登場の上野さんです。前は2019年9月発行のニュースレター28号で“水車まつり”について投稿いただきました。上野さんはいろいろな活動をされていますが、特に古文書の研究では大変造詣が深く、日野市郷土資料館講座“村絵図を楽しむ”シリーズの出版などもされています。これについては2015年にOB会にて“日野の環境と地名”と題して講演頂き、ニュースレター4号（2015年9月）で紹介しています。今回は新OB会長の田中良一さんにお声がけ頂き、久しぶりに投稿いただきましたので以下紹介します。

百草にあった領主林（御林おはやし）

OB会 上野さだ子

私は環境大学OB会の結成時の会員ですが、長期欠席で失礼しております。ただニュースレターは毎回ご送付いただき、皆様の自然に対する関心の深さと実行力に畏敬の念を抱いております。先日田中良一様より、ニュースレターの原稿を依頼されました。欠席続きのおわびに、現在私が関心を持っている、日野の山林について書かせていただきます。

江戸時代の日野には百草村や程久保村などに御林（おはやし・領主林）がありました。江戸時代の「林」は百姓持ちの山林ですが、「御」がつくと領主や幕府関係のものとなります。「御林」は百姓が自由に出入りできず、木も伐れないお留山なのでした。

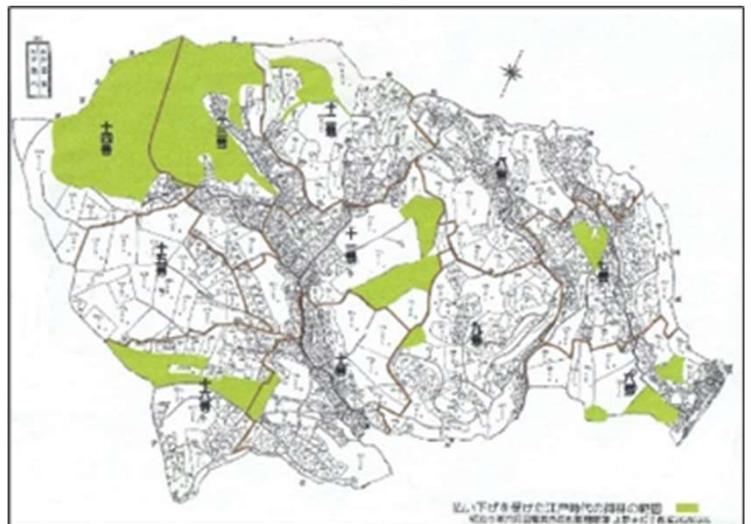
百姓の入会地などが御林に取り込まれた

百草村では江戸時代最初の領主、旗本の小林権大夫が百姓の入会地など32ヶ所を御林に取り込みました。百草は府中に武蔵国の国府が置かれたためその影響が大きく、平安時代の承暦3年（1079）には真慈悲寺で僧長巖が写経した記録があります。鎌倉時代には源頼朝が真慈悲寺を保護し、後白河上皇の法要に僧侶3人を参加させたと『吾妻鏡』に記載されています。江戸時代にはその跡地に榊井山松連寺、その後寿岳山松連寺の2寺が存在していました。江戸初期の百草領主、旗本の小林権大夫は榊井山松連寺を保護（建立？）し、倉沢観音堂を建立するなど信心深い人として知られ、文献や石造物などが残っていますが、府の方針もあるとはいえ、入会地などを御林に取込んだことは、百姓にとっては過酷な処置でした。

（※現在、郷土資料館で百草村名主守屋家の襖の下張り文書を調査中で、小林権大夫発行の年貢割付状などが発見され、上野も「日野の古文書を読む会」として整理に参加中です）



小林権大夫坐像 川崎市全龍寺蔵



江戸末期百草村御林位置と規模

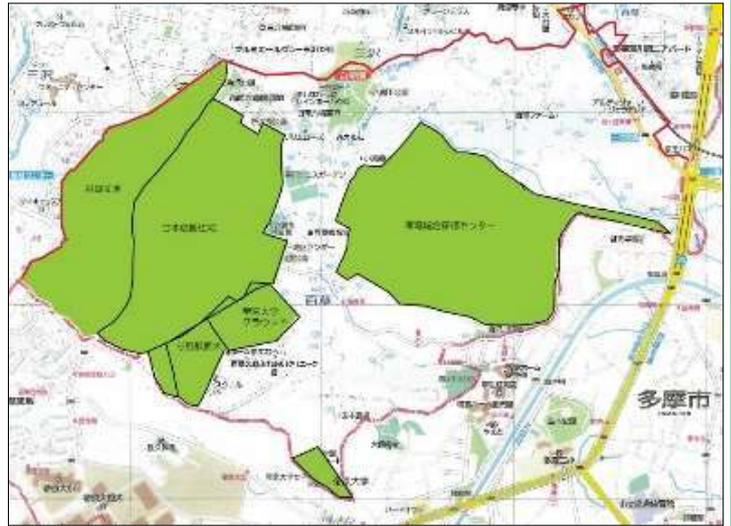
百草は幕府領となる

小林家は正徳4年（1714）に村人とトラブルを起こし、越前に転封されました。それ以後百草村は幕府領になり、明治まで続きました。御林は勘定奉行御林方の管轄となり、御林からは近辺の河川堤御普請や街道の橋などの用材を出したり、薪炭として出荷しました。幕末には、江戸市中の薪炭の不足のため、近隣の御林から出荷させたので、百草でも御林から薪を出荷した慶応元年（1865）の古文書があります。1年に約1000束を伐出し、多摩川べりまで運び、船で7里下り、東京湾6里を渡り、炭会所御蔵のある神田上水河口の新し橋（あたらしばし・現美倉橋）に船を着け、水揚げして炭会所へ届けました。百姓の労賃他の費用は幕府が支払い、跡地には植林しました。江戸中期の植林は松材が70%、幕末は松とヒノキが40%、ウルシ2.5%で、幕末には商品意識した植林内容となっています。

払い下げられた御林

明治政府になり資金難からか、明治6年、御林は百草村に500円で払い下げられました。この頃の500円は大金で、6割を村人が出資し、4割を百草出身で横浜に出て生糸貿易商として成功して青木角蔵が負担しました。

元御林は、村の共有林として6組に分けて管理を続けました。それが昭和40年代に離村者や会社員が増え維持できなくなり、協議の末、畑は個人持ちに、山林は日本住宅公団・日本信販・東電学園・帝京大学・杉野学園などに販売し、その結果、大規模開発となりました。



昭和40年代 日野市百草の大開発

残った里山

ところが百草南西部倉沢谷戸では、石坂義次氏などが里山と農業を守り、里山が残りました。平成12年義次氏の逝去後も遺族が遺志を継ぎ、「石坂ファーム」として農業体験や田んぼの米作りを行い、また他の遺族は相続地を緑地として活用しながら日野市との緑パートナーシップ協定を結び、土地を市有化し、仲間と「倉沢里山を愛する会」として緑を守っています。その活動は周囲の人々の賛同を得て、新たに3件の相続が起こった際にも緑への協力が得られました。この他「真堂が谷戸の里を愛する会」も同様にパートナーシップ協定を結び、現在の管理面積は約40000㎡となって里山風景が保存されています。

(詳細は『多摩地域史研究会会報』2025年5月号に掲載予定です)



百草の里山風景 HP「アリスファームの丘」より

OB会コラム②

今回のOB会コラム②は昨年12月発行のニュースレター51号で“ホタルのゆべ”を投稿頂いた三村さんの再登場です。ホタルの話ではホタルの一生や、餌のカワニナなど大変興味深く勉強になりました。今回はカワセミハウス協議会主催イベント オクトーバーフェスト「黒川水路を歩いてみよう」について投稿頂きました。我々の身近な豊田駅から黒川清流公園周辺の話ですが、日頃何気なく見ている景色にも歴史があり、新しい視点を感じる内容となっています。以下紹介します。

黒川水路を歩いてみよう

OB会 三村 聡

2024年10月12日開催 カワセミハウス オクトーバーフェスト 黒川水路を歩いてみよう
コース：カワセミハウス～清水谷公園～山王下公園～黒川清流公園～カワセミハウス解散
主催：オクトーバーフェスト実行委員会、黒川マイスターOB会、みずとくらす・ひのある参加者の依頼で、記事にしました。

まちあるき配信

「黒川水路を歩いてみよう」では自然を楽しみ、水の大切さや歴史を感じました。また、まちあるきの様子は、実践女子大学学生によって、カワセミハウ斯拉ウンジでzoom配信しました。



実践女子大学 写真提供

JR 豊田駅

明治34（1901）年、地元の有志の寄付によって甲武鉄道の駅として開設された。当初は、南口だけであったが、昭和33（1958）年日本住宅公団多摩平団地がつくられ、利用者が増えて北口が作られた。この時、ここにあった共同墓地は善生寺の北と町営火葬場に移転した。多摩平団地は建て替えられて「多摩平の森」となった。2010年からは、中央線の発車メロディーが旭ヶ丘に住んでいた巽聖歌が作詞した「たき火」が使われている。

黒川水路

黒川は豊田駅北口階段下の湧水が源流で、豊田駅東の陸橋から水路が始まり、崖線下の湧水を集めながら、総延長3.1Km、内暗渠1.2Km川辺堀之内で豊田用水と合流するまで高低差20mです。湧き水が豊かで、清い水が流れています。水温が低いため稲の栽培には適さず、農家の人達は、悪い水、困った水＝黒い水の流れる川という意味で黒川と呼ばれてきました。

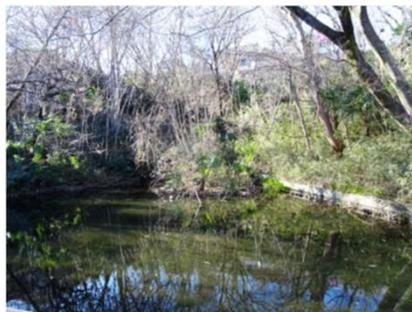


昭和30年初頭造成部

源流部から下流の壁面は玉石積みの造成地が続いている。昭和30年中期に豊田駅北口周辺が開発された時、「日野台地の山」を階段状に整地し、その縁を流れていた黒川の流路を残して造成されている。今も玉石の間からは、水が湧き出して、黒川へ流れ込んでいる。

清水谷公園

周りはうっそうと木々が覆し、趣たっぷりだが、この清水谷の「湧水の池」も昔はゴミ捨て場でした。住民と行政がゴミを処分し公園に生まれ変わりました。水鳥の楽園で、10月桜が台風で折れましたが、10月から4月迄咲いています。問題は、西友跡地にマンション建設が、予定されています。φ1.5m、φ2m深さ20mの杭が、46本撃ち込まれます。清水谷公園の湧水のみならず、黒川清流公園の湧水も影響が心配です。



山王下公園

公園には、清水谷公園からの水が引き込まれた水路がある。北側にある梶山には古くから日枝神社こと、山王さまが祀られていました。社あたりは杉の森で、大木の根元から地下水が湧き出していました。昭和10年代、この森は伐られ、山王さまは若宮神社に合祀されました。今でも保存緑地の中には、神社の階段が残っている。緑地からの水量がある湧水により、黒川は水を増やしていく。公園下流から暗渠となります。豊田の七森の一つです。



豊田の七森

「豊田の七森」といって七つの神社（若宮様、八幡様、天神様、惣神様、山王さま、三島様、弁天様）がありました。湧水と寺社のあった場所は一致することが多く、湧き水は地域の信仰上重要な場所であった。湧水と寺社のあった場所は一致することが多く、湧き水は地域の信仰上重要な場所であった。水神様か？



剣道場北湧水



クレソンが、群生している。



水辺のある風景日野50選 水辺の案内オブジェ
第五小学校 5年生作品

黒川清流公園

黒川清流公園はあすまや池から中央線まで東西約600mの長さで、1985年公園整備されました。背後の崖線緑地は1975年、日野の自然を守る会のはたらきかけで約6万㎡が、東京都の緑地保存地域として指定されました。日野の自然保護活動発祥の地といえます。クヌギやコナラなどの樹木、野草などの植物、野鳥、昆虫、水生植物などの生態系も豊かで、自然観察場所として五感を働かせるのに最適です。



わさび田

崖の下に流れ出る湧水を利用したわさびの栽培は100年ほど前から行われていた。多摩平団地の開発、汚水処理場の建設によってわさびの栽培は行われなくなったが、約20年前より「黒川湧水を生かす会」によってわさび田が復活した。

わさびは水の流れが悪くなると育たなく、養分を含んだきれいな水が必要である。わさびが栽培できるということは、豊かな湧水があるという証拠といえる。しかし、温暖化の影響で、水温が17～18度と高く、ワサビ栽培の適温は、12～15度で、根腐りして栽培できなくなりました。



憩いの場「坂牧釣堀園」 みんなのふるさとこぼれ話57より

今から60年ほど前、豊田駅の北側に多摩平団地ができた頃、現在のわきみず池付近に「坂牧釣堀園」が開園しました。坂牧氏は、この地が年間を通して水温があまり変わらない清潔な湧き水に恵まれていることに着目し、やがて釣り堀を始めました。坂牧釣堀園では、ヘラブナ・マス・金魚の他、氏が錦鯉発祥の新潟県山古志育ちだったからでしょうか、錦鯉・食用鯉も扱っていました。当時の吹上（現在の東豊田三丁目付近）には今のように家はなく、田んぼと畑ばかりだったので、崖線に掲げた「セントラル葡萄酒」「釣堀」、屋根の「越後特産錦鯉」の看板が中央線の車窓からよく見えました。釣り堀には、市内企業で働く人や社宅の人、多摩平団地の人が休日に子連れでやって来たり、中央線豊田駅にも近かったため、近隣から訪れる人もいました。木立に囲まれた野趣あふれる釣り堀は、休日に近場でホッと一息、あまりお金のかからないレジャーとして、昭和30年～40年代の釣りブームと相まって人気だったそうです。しかし、昭和40年代に入ると周辺の宅地化が進んだため、坂牧釣堀園は幕を下ろしました。黒川清流公園は、今も人々の憩いの場となっています。



日野市
郷土資料館
写真提供

黒川水路は、ひょうたん池から下流は、暗渠で吹上から開渠となり、川辺堀之内で豊田用水と合流します。予定時間が過ぎたので、みんなで笹船を作りながら、黒川に浮かべて、カワセミハウスに戻りました。参加者は、十数人でした。

AI アシスタント

この情報が重要な理由は、黒川水路とその周辺の自然環境や歴史的背景について詳しく説明しているためです。特に、黒川水路の湧水の重要性や、地域の自然保護活動、歴史的な出来事、そして地域住民と行政の協力による環境改善の取り組みが記されています。これにより、地域の自然環境の保護や歴史的価値を理解し、次世代に伝えるための重要な資料となっています。

参加者の感想を述べます。

1. カワセミハウスに帰ると配信映像を見ていた方から、ここでもみれたよ！の声を耳にした。実践女子大学生の協力により、漸進的な方法で実施された。また学生の自然を楽しみ、水の大切さや歴史を感じた声が出発点となり、若い方々の自然保護活動参加に繋がればと思った。
2. 清水谷公園遊水池は昔ゴミ捨て場だったのが住民と行政の協力により立派な憩いの場となった事を知った。日野市民が自然を大切にしていることの象徴であろう。しかし、昨年大きな桜の大木が2本切られた。大木の木陰のベンチで本を読みながら、三脚を立ててカワセミの飛来を待つ人の姿をしばしば目にしていたので、伐採後新しく桜を植えられる気配はなく、ひこばえも刈られた。設置当時と現代人との認識の違いか？残念な現状である。
3. 地球温暖化は今対策をとらねば、益々ひどくなり、取り返しのつかない事態になるとの警告に拘わらず、積極的対策はとられていない。わさび田が温暖化の影響で栽培できなくなった事象は温暖化が我々の身近にも迫ってきている事例であろう。
4. 黒川清流公園は環境市民大学や黒川マイスター講座においてもカワセミハウスでの教室同様に重要な野外教室である。この地の歴史的変遷から、住民ボランティアと行政の協力により自然豊かな公園が維持されていることを知った。現環境が維持され、現存の動植物の生存が維持されてこそ水と緑の町の日野市と言えるのではあるまいか。大変有意義な町歩きでした。

今回、オクトーバーフェストにて開催されたまちあるき実践女子大学須賀ゼミ3名が参加しました。三村さんの知識によって、豊田周辺を新たな目線で知ることができました。現代の暮らしに関する情報から、豊田が誇る豊かな自然に関する事など、幅広い内容を網羅されていたことが印象的でした。特に、豊田の七森と湧き水に関するお話が興味深かったです。「日野市は豊かな湧き水のある場所」というイメージを持っていましたが、古くから寺社により神を祀る等、昔から大切に育んできた資源なのだと感じました。当日、実践女子大学須賀ゼミの学生はZOOMアプリを使用したまちあるきのオンライン中継を実施しました。ICTの技術を用いて、三村さんが語る自然や暮らしに関するお話が、様々な世代に広がればと思います。

以上